

I—II 現代における個人

(議長 饗庭孝男)

金南祚

饗庭 二日目のまず最初のテーマといたしまして、現代における個人という題で、韓国の淑明女子大学、金南祚さんにお話をいただくわけでありすけれども、この中に盛られました問題と、もう一つはこの総合テーマであるところの現代における人間と文学ということを最初にちよつとだぶらせながら私なりに整理をいたしまして考えてみたいと思います。

総合タイトルのほうから考えますと、国際関係の再編成というのが現在行われているということですね。それから、地球規模の自然に対する危機というものが迫っている。これはおそらく生態論的な問題としてとらえるべき部分であろうと思います。もう一つは、最近の遺伝学の生命へのアプローチが非常に画期的なものがあるということ。

以上が大体総括的な問題だといえますと、もう少し具体的になりまして、たとえばかつての西欧中心の合理主義への反省というものがいま起こっているということでありす。おそらく一九五〇年代の最初にレヴィ・ストロースが『人種と歴史』の中で明らかにした問題でもありまして、それが実に予言的な形であらわれたのが今現実化しつつある。そういう意味での合理主義への反省という問題があります。

先ほどふれました国際関係の中の再編成というものが、部分的には非常にドラステックに行われているわけですが、そういう場合は文化あるいは民族という問題が前面に出てまいります。何よりもまず、いわゆる文化に対する見直しという問題であります。これも一種の地域文化あるいは民族の差異性を確認するところから始まるわけでありまして、いきなり民族の、あるいは人類の平等

だとか平和だとか、そういったところにはならず、むしろ差異性をみとめて考える。その上での文化間の秩序あるいは均衡という問題が必要ではないだろうかと思ひます。

その上で、次にきますのが、現代における個人というテーマにも深く関連してくるわけですが、アイデンティティの危機という問題がございます。これはおそらく現在の管理社会、いわゆる「私」なき社会、そういった状況における「個」のあり方、こういった問題になるかと思ひます。そういったしますと、共同体と「個」との関係、その関係の見直し、こういうふうに進展していくだろうというふうに思ひわけがあります。

従つて、もう少しそれをミニマムな次元でとらえまして、次に現代における個人というタイトルに即して、私なりに読んだ金さんのテキストを要約したいと思ひます。

細かく項目に分けますと、大体十二ぐらいの問題点があったらうと考えております。まずそれを簡単に述べまして、それをさらに要約すると以下のようなになるかと思ひます。

一つは、世界と人間との関係でありましょう。これを金さんは、現在の持つている同一性の性急さとしてとらえられたわけでありす。

次の問題としては、個性喪失があります。現代的な個人主義とは一体何だろうか。別な言い方をしますと、それがエゴイズムとだぶっているんじゃないかというふうに思ひます。そこからの回復のモデルといたしまして、「単独者」という概念が出てまいりますけれども、それを内面的にイメージ化するものとしてキリストなりプロメテウスが

そこにまず掲げられた。こういうのが一つのブロックであります。

その次のブロックとしては、個人性の放棄という問題が、登録番号その他の問題としてとらえられている。それと連動しているのは、機械化というよりもさらに自動機械化の時代に現在入っているんじゃないか。

さらにその次としては、そういうような形に進展していきますと、個と共同体の関係が非常に見えなくなってくるために、逆に言えばエゴイズムの問題がそこから出てくるんじゃないかということでありま

す。  
そして再び「単独者」の概念に戻りまして、そこでキルケゴールの問題が出てまいります。このような「単独者」たることによって逆に言えば他者と結びつく、そういう一つの問題提起がなされております。さらに、もう一人のニコス・カザンザキスの言葉を引用されながら、過去、現在、未来にわたって「単独者」というものがいわば一つの接点としてあらわれるということ、そしてこの場合には、その下位概念として、いわゆる自分たちがよって立ったところの自我、種族、人類、こういうレベルで問題になっております。

一番最後に内面の重要性が説かれまして、ちょっと難しい表現であ

りますけれども、無限量の内面という言葉が出てまいります。こういう中で、バシュエールが引用されている。大体これが十二の問題点であらうかと思えます。

従って、それをさらに四つの問題点に集約いたしますと、一つはつまり個性喪失の問題、それからまあってエゴイズムというものが先ほどの管理社会の問題として出てきたのではないか。そういった場合に、一つの問題提起として考えられるのは、「単独者」としてのいき方、これがさまざまなモデルを含めて提出された。もう一つは、メカニズムの問題、これが現代の一つの現象ではないか。そして最終的には、内面をもつ真正の「自我」に我々は達するか。このようなところであつただらうと思えます。

いま私なりにまとめたわけでありませけれども、今日、金さんのご希望としては、いまのまとめましたテキストを基盤としながら、そこから何か自由に発言していただく。つまり自由にこれを取り上げつつ、あるいはいまお考えになっている新しい問題も提出されつつ話していただく。こういうことになりました。ではよろしくお願いいたします。

金 私の原稿を上垣外先生が翻訳してくださいましたが、とても文章が読みにくいようになっていきますから、ご了承ください。さるようお願いいたします。

私は、この場に来ていらっしやる先生方とは異なって、日本語を終戦前の幼いときに学んで、若干いま記憶している立場です。私は韓国語で韓国の現代文学を教えています。ご承

知でしょうが、韓国語という言葉は非常に閉鎖された言葉です。世界人口の約一〇〇分の一人の人にしか聞き取ってもらえない言葉です。この言葉の中を泳ぎまわって話したり書いたりして行く間、閉じ込められた言葉のさびしさを十分に味わいつくしたと言えますが、でも幸いに人間には心情とかいうもう一つの機能がありまして、それによって糸をたぐるようにつながりを持っていくと思います。その確信に頼って、私のいままでの生き、また学び、教え、書くということを続けてきたんです。

ある人の自叙伝を他の人々が読んだ時の反応は、本の中の人物に、「自分」を見てとるか、あるいは「他人」を感じるか、という点から、様々な違いが生まれるものです。

自己と他人との間を葛藤の関係に、あるいは共感の関係に受け取るかによって違いが起きるのですが、それ以前に自己と自身の内なる存在との関係について認識が成り立っているか否かによっても異なってくるのです。ところでキリスト教の教理にいう原罪が全ての人間に公平にならされる宿命的な重荷であるということからも、人類全体の何らかの同質性は成立する、という言い方はできるでしょう。

現代の人間社会にあって、個性の喪失と人間関係の断絶を憂う声が高く、それは自我喪失、または現代的個人主義などと名づけられます。これは解放と融合を志向する理念との

間に深刻な摩擦を招いています。キリストがはりつけにされて死なれた十字架の象徴性において、その垂直部分は神との紐帯であり、その水平部分は隣人との触れ合いとして解さる。耳慣れない分析でしょうが、この二本が交わるその中心こそキリストの胸の部位、すなわち聖なる心臓であり、さらには人々の心である、と言いたいのです。すべてのいのちを通じて尽きることのない人の心情とは、まさに神とのあいだ、人とのあいだ、そしてその他のすべての物たちとのあいだを、大河（楊子江）のように流れ、浸透するものであり、これこそ人間に授けられた祝福の力であると思われれるのです。

キリストその人は、苦しみのさなかにも保ち続けたあふれる心情と純粋な熱情によって彼の特別な使命を成し遂げられました。本稿で論じようとする単独者もまさにキリストから探って見ようと思います。ただ彼は神の子であり、神そのものであるという宗教的な通念の圧迫を受けるために、人間の行為の範疇を越える点に理解の困難が生じるかとも思います。しかし十字架に掛けられた彼は最後のひと口の水すら拒まれて、虚空の高きにおいて血と汗と涙を流す限りなく無力な存在であり、そこで亡くなれました。神としては不可能な死を厳然と彼が通り過ぎた事実から、余りにも人間的で、かくのごとく歴史の中心を貫く単独者の行為を成し遂げ、それを永遠のものとしたのです。彼は、神の前でも、人の前でも、

ただ「ただ一人の者」だったので。単独性と個人主義は大きく異なります。排他的であることを排斥するのみならず「私（自我）」を「他人」に繋ぐ生産的な単独者を現代という時代の照明のもとに浮かび上がらせることこそ、ここで私が試みようとすることなのです。

人間世界の冷たさと暗さを救おうと神の世界から火を盗んだ刑罰に、コーカサス山のうえて鎖に縛りつけられて数千年の間、肝をついばまれ、食い取られるプロメテウスの伝説を、私達は知っています。彼の体は日毎に新しい傷を受けるのですが、このことを成立させるために、日毎、治癒が安らぎの夜の間に間違いなく起こったのでした。この物語はプロメテウスの伝説の骨子と言えるでしょうが、これに付け加える三つの仮説をカフカの本で読んだ事があります。

その第一はプロメテウスが重なる苦痛のために少しずつ岩を深く押しつけて最後には岩の一部分に同化してしまった、というもので、その次は、数千年が過ぎる間に、神々や禿鷲も、そして彼自身までもがかつての罪を忘れてしまったという、忘却の仮説であり、最後のものは、数限りない繰り返しすえに、神々や禿鷲までも疲れはててすわりこみ、傷口もまた疲れはてて癒え、残ったものはただ岩山だけだったというものです。無限の時空を背景にあなたも青銅の懸額のように浮き彫りされた孤独な単独者がついに超越的な安息にいだ

かれたということにわれわれは不思議な慰さめを感じます。もっと大切な点は、プロメテウスが水平線上にいる人間世界を垂直線上に位置する神の世界に近づけようという大胆な行為によって久遠の年月の間、ただひとり刑罰を堪え忍んだ、という事実です。神の領域に迫ろうとする彼の激しい願いは今日までも続き、これは人間の雄飛でありながら、それと同時に自ら選びとった果てしない苦しみであり、刑罰であるのです。キリストやプロメテウスにあっては、単独者の孤独ということが、比類なく純粹で堅固であり、これはまさしく巨人の面影と言うべきものだとおもいます。

現代とは、どんな時代で、現代における個人とはどのような存在でしょうか。こう問う時、急に我々はめまいと当惑を感じます。まさに私達の時代、自らの面影が問題になっているというのです。

まず、現代の人間は余りにもしばしば統計数値の名のもとに個人性を放棄し、責任感を希薄なものにしています。人格や姓名と無関係な符号や番号が多く用いられます。旅券番号、銀行口座番号、軍隊番号、住民登録番号等々です。

一票の平等の原則に縛られて、よりよい意見の小数票が劣った意見の多数票に敗北するということが起きます。極めて多数の人格が一つのイデオロギーの統制下に盛り込まれるという例もあげられます。子供達が手にして歩く昆虫採集のおお

きな網、それをずっと大きくしたような網に生け捕られて棲息する匿名の個人の群、彼らは解放された個人、創造する個人の資格を奪われているのです。そればかりか批判し改革する個人にもなれず、一切の選択の失われた無力な存在に過ぎないのです。さらに現代は競合と速度優先の時代であり、スポーツを例に取れば、陸上短距離で一秒を縮める記録更新に百年の時間を捧げます。選手に与える賞賛を彼の祖国の旗を国旗掲揚台に掲げるという形で行うのです。世界一周を一ヶ月程度の時間で計画し、休暇に持っていく雑誌は読みもせず、ごみ箱に放り込んで来ます。待っていれば必ず退屈病になり、授受の関係は交換価値をその尺度にしてしまいます。

代行業務を好み、健康診断や病気の治療のほかは相当部分を他人に分担させ、一定額の報酬を支給します。極端な話ですが、昔の韓国では先祖の葬式に大声で泣いてくれる役目の人までいたのです。古典は注釈本で、名作は要約本で読み、最近ではあれこれ何でも漫画で済ますことが増えています。契約結婚や試験管ベビーなどの方法が開発され政党と労働組合のほかにも、同好クラブがはやっています。

鍵と暗号を好み、流行に敏感で、インスタント食品と使い捨ての食器に慣れっこになっています。機械化の段階を過ぎて、機械自動化の時代に入っています。自然から人体の美容まで人工物と接ぎ木して共同運体制で成否の緊張を減らし

ています。情報と電波媒体とスポーツに熱狂します。文化の様相、論争にあっても内容の充実以上にその優位の競争に熱中する印象を受けます。

実験主義と実用主義、現金報償主義等が先を争うように見え、物量の飽満のもたらす空虚感、各種公害からくる意識の過労などが極端に達する所にまできています。個人利己主義、集団利己主義の様相がかしこに見られ、記憶を強要する各種の宣伝術の波が高まり、われわれの時代をほとんど溺死させようとしています。同時に、目にみえない不幸と敗北感が胸の奥からひとりひとりに衝きあげてくるのです。

内面的な飢えと自我不在の空しさが赤い衣を着せられます。精神性のあらゆる次元、魂の根源的な深みまで復帰しようという自覚が生まれ、その義務を心得るようになったのです。人と人との交わりの脆弱さとその荒廃、懺悔と、涙に満ちた自己の省察が欠落していることについての自覚です。人類がどう急発展、急旋回を遂げようと、人間の本质や、久遠の歳月をかけて養われた精神的習慣が、一度にその地肌を覆われてしまうようなことはありません。

このような時にあたって、人権と市民宣言、民主主義の拡大、群衆ではない大衆の出現という状況のもと、人間化、あるいは人間性回復の声が当然、高まりました。現代国家は、国民の親権者であり、国民に対するに、平等な管理と、可能

な限りの繁栄、並びに自由の保障とを基本にしています。国力の宣揚と国家間の平和を志向していますが、いずれにせよ、人権尊重と人類福祉に力点をおかねば、名実を兼ねそなえることになりません。この点に関して大切なことは、現代が衆知の時代だということです。

卓越した個人と、水準点にある多数人ととの比重を比べれば、前者は少し前の時代の選択であり、後者は現代的価値観だと言えます。創業者や先導者以上に実行者群の重みが大きいと思われるということです。そしてまさにこのような多数人を解体したそのひとつひとつが、現代における個人にほかなりません。こう言っても、私がこの話の中心課題とすることは、なお遙か先です。方向を変えて、一人称の現住所、そこに脈うつ人間の真実と苦しみにもっと近づいて見たいのです。

このあたりで、キルケゴールの言葉をとりあげたいと思います。「私が自身の墓碑銘を選んだとしても、単独者以外には望ましいものはない」。彼はまた「永遠なるもののためには決ってただ一人のひとが来たり、この一人が現れるためには神の助けを求めねばならない」と言いました。「それは能力であり、芸術であり、倫理的課題でもあり、これを実行することはその時代の芸術家にあつては命を掛けるべき価値」だともいいます。「真理は単独者によって受け入れられ引き継がれる」、あるいは、「単独者となることを拒まれた者はひ

とりもいない」として、単独者であることは誰にも可能であると述べています。キルケゴールの定義する単独者は、神の御前にひとりあることに基づいています。辱めと加害を前でもただ一人である事を示唆したのです。辱めと加害をこととするのは、単独者ならぬ群れの方だととらえたのです。彼らは理性と道徳の抑圧を感じられない盲目的の群衆であり、粗暴な衝動に引きずられます。彼らは顔と名前と責任の分担を持ちません。

キルケゴールはこうした単独者と群れとを区分して、孤独であり、義である単独者に賛同と支持を表示しました。彼の論理の核心は「まさに単独者であることによって、他者と一致できる」という、真に力強い肯定なのです。ところでこのような考え方は、別のところでも似た発想を見いだせますし、我々の思想の中でもその骨格をなしているといえるほど、普遍的なものなのです。真の単独者がまた他の単独者と融合するという点です。こうした発展的な出会いを肯定し、強調してわれわれの精神を励ましてくれるということです。真の私が真の君へと歩む足どりが大切なのです。それとは区別される、貧しい模造品の人間関係を憂いと警告する声をマルチン・ブーバーが発しています。

「おまえもなく、私もない縛られた人々が行進している。分裂した多数人たち、彼らは空洞の深淵のなかに沈没すると

ころだ。」

この言葉に、私達は包装紙のように脆弱な偽りの共存の危険をはらいのけ、真の融合へと進まねばならぬという激しい自覚に目覚めるのです。

人と人の間に生じる媒介的機能に対しては、T・S・エリオットの主張に耳を傾けるべきでしょう。どの分野、どの人間であろうと単独では完全な意義を持つことはできないという見地から「一つの新しい芸術作品が創造されるとき起きることは彼以前のあらゆる芸術作品でも同時に起こる」と言い、過去の意識から発展させるか、何かを借りてこなければ、彼の創造を持ちこたえることはできないという論を立てています。

ここで我々は一個人が同時代人との結びつきを、また過去の人との結びつきを持ちながら、伝統と養分を与えられるという言葉に耳を傾けましょう。私たちも、隣人に、また後世の人に対して触媒者になるのです。選ばれた個人と個人の間で起こりうる伝承の事実を特に大切なものになります。こうしたことはどの時代にも起こり、現代もまたその例外ではありません。

そのような論理を、一層鮮明に表白しているニコス・カザンザキスの言葉をしばらく聞いてみましょう。一生を酷いほどに休むことなく疾走し続けたギリシヤ人カザンザキスは

彼の著書「靈魂に立とう」の中で、「その畏れは汝のものでなく、おまえの無数の先祖達がおまえを通じて叫ぶものであり、その欲望は、汝ならぬ無数の未来の世代がおまえの胸を借りて渴望するものなのだ」「私の内に不滅の叫び声があがっている。労働する苦しみと自分を生に、あるいは死に迫いたてる苦しみが猛烈に波うっている」という。彼によれば、自我は種族を、種族は人類を、人類は大地を故郷としている。神と人間の関係でも、垂直ではない、水平的な出会い、例えば戦友のように意識されています。キルケゴールとカザンザキスの二つの強烈な個性もここでは互いに引き合う同質性を示しているのです。このように「真のわれ」と「真のいまひとつのわれ」との間の強力な結び付きは人間論の基本であり、普遍的な真理であるという結論に達します。

人は彼の時代の子供であり、現代は我々にとり唯一の選択であり、絶対の与件です。我らの望みと栄辱がまたわれわれ自身の姿なのです。国家はやはり国民の幸福と発展を計ろうと心を砕き、国家間の共栄と不可侵の盟約を互いに緊密に結びようと努めています。

それにもかかわらず、まさにこの現代にあつて人間疎外と個人性の脆弱さが繰り返し指摘されており、これを回復しようとするものは人間性への渴きを自覚するのです。神との断絶、隣人への無関心、荒廃した心について、人は告発し、指



弾します。それでは現代はいったいどんな時代で、私たちは  
いったい誰なのでしょう。

これに対して私は、残された時間で、人間の限られた外側  
でなく、無限の内面を探ってみようと思います。哲学者と詩  
人と一部の精神治療者達が採用した方法であり、それは人間  
の本質の深淵に向かって果てしなく問い、どのような答えに  
も満足することなく追求の真情を尽くすことです。これによっ  
てついに秘密のありとある告白を呼び出すことができ、外  
から究められなかった人のまことに、はじめて出会うことが  
できるでしょう。なぜならば人は計り知れぬ神秘的な器であり、  
私たちが生きる時空のいずこかにひそむ的が、あることはあ  
るのだと感ぜられるからです。

一本の蠟燭から炎に向かう、高く遙かな彼岸まで昇り行く  
夢想の解放を意図したバシユラルも想像力の力動と人間の  
本質への志向を限りなく過ぎ、ついに「原初より幾たびも反  
復する孤独」にたどり着き、それにも関わらず、人の生とは  
生成し、瞬間瞬間に新しい未来を獲得しつつ進む、創造の歩  
みだと理解したのです。みずからを燃料としつつ上に向かっ  
て燃える蠟燭の炎と同じに、です。そしてこれも、人がまこ  
との自我を求め行く歩みのもう一つの形に過ぎないのです。

現代はコンピューターが詩さえ書く驚くべき機械化時代に  
達しており、今や人間は自分自身の作った機械を凌駕せねば

ならぬという苦悩に満ちた課題を抱え込んでしまっています。  
それなのに私たちは現代の人間がいったい誰であるのかをま  
だ明らかにできずにいるのです。

人間の単独性は明らかなのか、それとも社会が彼を浸潤す  
る力が増えるに従って、単独性の減少が不可避であるのかと  
いうことさえ疑問です。前に申しましたように、現代は衆知  
の時代であり、それはある時代の行軍のなかのひとつの歩み  
と見るべきもののようなのです。しかしこんなことはどうでもよ  
いのです。ある時代の意義を高く掲げようとするなら、その  
鍵は、ただその時代の人間の成熟によってのみ、手にするこ  
とができるのです。いつの時代かにもことの全人的な「人」  
をもとめる渾身の追求が行われ、全き人間が発見されて立っ  
ているその背景に、あたかも静物の後ろの壁面のように、そ  
の人間の時代が、年代と名札を吊るすようになるだけのこと  
であるという言葉で、この話を結びたいと思います。この文  
章は、韓国語で書いて上垣外先生に送りましたが、先生も忙  
しい中で大体原文を翻訳したような形で、日本語と韓国語は  
非常に似てはいますが、言葉の使い方が違うんです。私は、  
これが皆さま方に非常にかた苦しい文章になったということ  
に、日本に着いてすぐ気がつきました。だから自分なりに重  
要だということを、まずい言葉で述べてみようと思います。

はじめはキリストを取り上げたんですが、人はみんな異な

るといふ自覚を持ち、その自覚から歩いていけば孤立感といったものにとどり着くと思えます。その人間たちを結びつける共通性として、一つの例を取らなければいけないと思えます。それが、キリスト教において宗教的観念で話す原罪と言いますか、生まれながらの罪、その宿命的な共通性を取り上げて、人間たちのつながりを示し、加えて、キリストにおいての純粹で透明なる単独者の面影を一つ掲げてみようと思えました。

もちろんキリストは人間かという反問がなされることがあるかもしれませんが、彼は神でもありませんが、神でない条件を持っています。それは、神であれば絶対不可能である死を通り抜けた点です。そして、神であれば不可能であった死をくぐり抜けた、そのくぐり抜けるありさまが悲惨で、最後の一口の水すら断られて血と涙と汗を流して死亡し、それが歴史的に証明されました。

そしてその一人の人が死んだという事実が、その人が本当に透明で純粹な個人性に現れ、その個人性の中に二〇〇〇年という長い間のあらゆる人を抱く性質を持っています。そしてまさにその中で単独者と、また単独者たちのつながりが現われてくるのではないかと、私はそのように考えました。

もう一つ、ここに私が掲げたのが、カフカの本です。プロメテウスはご存じのように神の火を盗んで人に与えた刑罰に

コーカサス山の上で鎖にしばりつけられて数千年の間肝臓をついばまれる刑罰にあたりました。このプロメテウスという人は、昼は肝臓をついばまれ、夜はそれが治癒するという不思議な生理を持っていた人です。夜それが治るといふことは、朝になれば新しい傷を受け入れるための準備としてそれがいやされました。ちょうどシジポスと同じ点があります。

シジポスは石を転がして山のとっぺんに運びましたが、その瞬間石はまた下にくろげ落ちるのです。それを繰り返すのですが、私が考えたことでは、シジポスが石を、大きな岩と言われますが、胸に密着させて、全身の力をこめて山の上これを上げるときは、少なくとも彼は石と二人でしたが、石が彼より先に落ちていき、彼は両手をぶらさげてその山道を降りてくる場合を、私はたびたび考えさせられるのです。

私たち、人生にも、石を山に運ぶ場合と、運んだ石が先にくろげ落ちて一人で降りてくる場合と、それが相互的に起きるんじゃないかと思えます。シジポスにおいては、山から一人降りるときさびしさに、私は切実な共感を持つのです。同じくプロメテウスもそのような感じを私に起こさせました。カフカの本によれば、定説のほか3つの仮説を添えた文章がありまして、私は衝撃を受けましたので、こちらに例を取っています。

その一つは、苦痛のために岩を深く押しつけて、最後には

岩の一部分に同化してしまったというのです。その次は、数千年が過ぎる間に神々やハゲワシも、そして自分自身もかつての罪を忘れてしまったという忘却の仮説であり、最後のものは数限りない繰り返しに神々やハゲワシまでも疲れはてて座り込み、傷口もまた疲れはてて治って、残ったものはただ岩山だけだといったものです。

カフカは四十年十か月の生涯を終えて亡くなられた人ですが、若いときにこんな仮説をその文章の中でつづっています。ここで私が取り上げたいと思ったのは、神の領域に進んでいった人間の熾烈な欲求、それが今日までも続き、これは人間の雄飛でありながら同時に人間が自ずから選択した苦痛、また刑罰であったということです。

いままで全時代を通じて、人たちは常に神にでしょうか、その対象のことは確実に話せませんが、より上、より上のほうに対して挑戦をしましたが、その挑戦の欲望は熾烈で、表現が不可能なまでの苦痛を伴っていました。これが人間の顔で、また人間の姿だと私は思います。この顔、この姿の後ろに背景、また年代、その人が生きている時代だったと思えます。だから、これによって人間はいつの時代にあっても、その本質的には同じものであって、その背景の絵が変わったのではないかと思えます。

どうしてこんなことが言えるかと言いましたら、人間にお

いての精神性の習慣などは変わらなず、いつの時代になっても同じ性質だと私は思いますから、プロメテウスの話の中でプロメテウスが神に背いて火を盗んだというのは、神の知恵に対する欲望で、それはすべての人間のいつの時代にも共通な面影を保っているということを、私は話したかったです。

十五ページの四行目から少し読みますと、現在の人間はあまりにもしばしば統計数値の中の因子の役割をします。それは、個人性とまた責任感を希薄にしたものにもなります。人格とか姓名とかかわりのない符号で、旅券番号といったものはその人の人格を後ろにしてものを言うものです。また投票の平等という原則が起きまして、よりよい意見の少数がより劣った意見の多数に敗北するという悲惨なことも起こります。また、イデオロギーの統制下に盛り込まれて生息する匿名の個人たちがいます。彼らは少なくとも解放された個人を放棄し、創造する個人の資格も剥奪されて、また改革する個人にもなれず、一切の選択が遮断された存在にすぎないのです。

またいまの時代は、競争の時代ですし、また情報の時代ですし、陸上の短距離で一秒を縮めるために一〇〇年の時間を費やしたということを皆さまはどう感じになるか知りませんが、その競争ということの寂しさにもいつか人類は目覚めるものと思えます。たとえばマラソンでは、私は一番遅れて入ってくる人に一番涙ぐましいと感じます。なぜならば、彼

こそが一番人間の共感が湧きます。とにかくそんなことに熱狂しながら、生きるということの情熱を費やしているのが現代人の生き方じゃないかと思います。

代行業務を好み、自分の体の健康診断とかいうのには自分が行きますが、そのほかのことは弁護士などにみんな任せられているのです。本を読むことについても、古典は注釈本で、名作は要約本で読み、最近は三国誌までも漫画で読むというような時代になりました。結婚も契約に基づいて、子供も試験管に入れてつくるといふような形になります。こんなことが現代の様子といえるでしょうか。

そしてテレビ、ラジオを好んでいます。笑い話ですが、韓国でもTVでは西洋映画を韓国語で録音をして見るのです。そしてアメリカに行つて同じ俳優がアメリカのスクリーンに出て英語を使っているのを見て、私はびっくりしました。あの人が英語もできるのかなと錯覚を起こしたことがあるんです。

こうしている間に、いろいろの公害がつけられ、意識の過労がもたらされて、何か進軍に取り残されたさびしさなんかと同時に大勢の人、もしくは全部の人の胸から突き上げて、目に見えない不幸と敗北感を否定できないのです。そして内面的なひもじさと、自分がどこにあるかわからない空虚が、まっ裸で浮かびあがってきました。

精神性、また霊魂性のあり場所に復帰しなければならぬという自覚が生まれ、その義務を認識するようになりました。人間関係は非常に荒涼たるもので、これに気づいたとき、涙ぐましい自己省察を自覚したものです。人類がどのように急展開しようとしても、人間の本质や長い年月の間の精神的習慣が変わるといふことはないと思います。

このようなときにあたって、人権ということば、また市民宣言、民主主義の拡大、昔は群衆でまた百姓でしたが、いまでは大衆という性質を出現します。人間化、人間性復帰の声が高まりました。いまの国家は、国民の親権者であり、国民に対して平等な管理と可能な限り自由の保障を基本にして国家を治めています。

国家と国家の間も、人権尊重とか、人類福祉とかいうことに力点を置かなければ、国際化に取り残されてしまうようなことになりました。そしていまの時代は、衆知の時代です。卓越した個人と水準点にある多数人とを比較して、一方を取るとすれば後のほう、水準点にある多数人をもっと大事にする、その価値観が生まれたと言えます。

こんなことを言いますが、現代における個人という題目に少しも進めなかつた気持ちでした。そしてキルケゴールを引用しました。キルケゴールじゃなくてパスカルとかカザンザキスとかありますが、私は本当に不思議でまた魅力的にも

思いますが、優秀なる歴史上の男性たちは優秀なる女性にたどり着いたんじゃないかと、女性を通り越して非常に優秀なる人、それは男性でしたが、男性であるという点に力点があるんじゃないかと、性を超えてより価値の多い存在にたどり着いたことを発見しました。

キルケゴールなんか、女のほうから見れば、彼は人ではなく精神そのものであったと言われるようなあり方で破婚をして、そして自分は破婚と同時に神と約婚したとか言われる、非常に宗教性の篤い人ですが、その人は「私が自分の墓碑銘を選ぶとしても、そこに単独者として書いてもらうこと、これ以上には望みはない」と言われました。そしてその単独者というのはどんな定義であるかということを書いています。これは訳してもいいと思います。「透徹した個人」が「透徹したもう一人の人」と引き合うとかいう点が、この人の文を引用した理由でした。

その透徹した個人でなければ透徹したもう一人の人を引きよせないという、本当の単独者のみ群れを呼ぶことができるという考え方に、とても共鳴をしました。真正な「私」は真正な「あなた」へと歩む足取りが大切であるということに耳を傾けるべきだと、私は思いました。

そして十八ページにいきますと、エリオットのことですが、究極においては同じ意味だと思いますが、少し話し方が異なる

人の系列として、エリオットをここに選びました。その人は、たとえばここにいい芸術があるとすれば、その芸術は一人から生まれたんじゃないかと、同時に多くの人の胸にめばえ、またその以前の時代から魂の中に育まれたとかいう必然的な結果である。だから人はみんなお互いに触媒作業をするということです。

あれは、キルケゴールによって本当の単独者はもう一人の単独者との間につながりが持てるということを力説しています。

キルケゴールの言葉で鼓舞されたことは、どの人でも単独者になれるということでした。一人一人の到達点において、その人が意図した単独者になれるということは、すべての人たちが可能性を分け合うということです。

そしてもう一人、カザンザキスというギリシヤの人ですが、この人の最後のエッセイ集で「靈魂に立つ」というのを韓国語に翻訳されたのを読みました。その人は、神に対する認識も、神が全能者じゃなく有能ではあるけれども、彼は汗と苦悩を持って戦う存在だと言っています。垂直線であった神の存在を水平線にまで引き離して、その神が自分の胸に向かつて「我を助けてくれ」と叫ぶのです。たとえば医者を手助けるのは患者です。それと同じように、神がだれかを助けたいとか救いたいと思えば、その救いたいと思っ

と相談をするという言い方です。「あなたを助けてあげたいから、あなたも私も助けてくれ」と。そして神は植物に対しても動物に対しても、あらゆるものに対して我を助けてくれと悲痛に叫び続ける存在だとカザンザキスは言っていました。

その人によれば、自我は種族の中に含まれて、種族は人類に含まれ、人類は自然に含まれるというようなことでしたし、自分の中で白人と黒人と黄色い人が、みんな一人の人の人の中でうごめいているとか、一人の人の胸にはその祖先たちの言葉とその子孫たちの叫びが一緒になって爆発するというような、非常に異なる存在の認識論を持っていましたが、その中においても透明で純粋なる個人がほかの人と完璧なかかわりが持てるという、先に言いました人たちとほとんど同じような結論になると思います。

そしてその結論に、この場におられる先生方も、私も、共鳴するんじゃないかと思えます。私たちは、みんなそれぞれに自分をつくりあげて、自分をつくりあげたやり方によってある人をつくりあげるのに力の限り助け合おうとか、お互いの中の共通性にめざめて、そのいじらしさとかいうことに対して愛情を持つんです。

韓国の 韓国の尹東柱という詩人の「星をうたうように、すべての死にゆくものをうたわせてくれ」という言葉があります。永遠なものを賛美するんじゃないくて、死にゆくものを

うたわせてくれということは、とてもいい文学的な発想だったといえます。

そして、最後の部分になりますと、さつき饗庭先生が指摘してくださったように、内面の無限性です。不思議さの容積が一番多いこと、大きいことは、人間の内面性です。

私の息子がフランスに立ち寄って、テーゼとかいって宗教的なかかわりで集まりを持っていた集団を見ました。そして私に話すことには「お母さんの文学性というのは、お母さんの霊性とかいうことに比べたらあまりにも小さくみすほらしいということを生涯忘れないくださいということをぜひ話そうと、何度か胸の中で確認しながら帰ってきた」と私に話してくれたんです。

人間の中の本当の無限というのは、霊魂性ということですが、それは必ずしも礼拝堂に行くとか洗礼をされたということではなくて、本能的に霊魂の奥行きとこのを知らされるのです。その奥行きの中のほんの一部分が文学だと、私は思います。

そして文学がより高いというような考え方じゃなくて、より低くして、その上に広まっているはてしない大空の霊的なものを一人の人の存在の中に持っているというその確信と、その祝福と、その喜びと、それに対する敬虔さを、何度も目覚ましていこうと望みます。

いろいろ偉い人の本から引用してきましたが、バシユラー  
ルという人も「蠟燭の美学」という本を出して、蠟燭の炎が  
上に昇り、はるかな彼岸で夢想を解放するということを言  
いましたが、そしてそれによって自分が得たことは、原初より  
いまままで幾度か繰り返す孤独にたどりついたということとし  
た。まさしく人間は、孤独にたどりつけるのです。それが人  
間の特権でないかと思えます。人間に対する一番真正な教科  
書は、その人が一生懸命に歩んでいけば、いつか必ず孤独に  
たどりつけるという約束です。そしてその門を何度かくぐり  
抜けて、後で悟るのは生くることの貴重さだと思えます。

本当を言って、人は負傷する動物です。精神的にも肉体的  
にも何度か負傷はしますが、その負傷の結果である悲惨な償  
いをつくしてもなお残るのは、生まれたこと、出生に対する  
喜びだと言えます。人はいろいろの祝福を受けてきましたが、  
私に一つだけ言わせてくだされば、私は見ることの祝福だけ  
でも素晴らしいと思えます。見るのがとても好きでしたし、  
見るという単純なしぐさを通じてあまりにも多くの喜びを私  
は受け取りました。

昨年、生まれてはじめてアメリカのヨセミテというところ

に行つて、三〇〇〇年の木も見ましたが、ある一つの木は下  
から上まで真ん中がポカンとあいているんです。だから周囲  
の部分だけ残つて下から青空が見えるんです。九十mぐら  
いの高さで、古びた木で、そして三〇〇〇年も生き抜いてき  
たんです。私は両手で抱えてみましたが、三十世紀の間脈拍を  
打ってきた生命体に私の体が触れたというので本当に戦慄を  
起こしましたし、いまそれを思い出すだけでも電気が流れる  
ような気持ちにひたれます。

自分なりに命の莊嚴さとかありがたさにたどりつき、また  
自分からそばのひとへと道をつくつて、お互いにふれあうと  
かいうことは、昔の人も考えだし、いまの人も、また未来の  
人も同じようなことを大勢の人が同時に考えたのではないで  
しょうか。 私たちが表現をしなかつたとしてもそのような  
ものが背景に時代というのが額縁のようにかかるのが二十世  
紀だとか二一世紀だとかいうことになりますし、その個人性  
の意義もこの比例により不変だということばで、私の話の結  
びにしたいと思えます。

本当に恐れ入りました。まずい言葉で申し訳ないと思いま  
す。

饗庭 どうもありがとうございました。

ただいまのお話は、私どもがテキストでお伺いしたお考えをもとにしまして、さらにいくつかの問題点が付け加えられたわけですから、全体を通してまして宗教的な、詩人的な感性を持った、いわば詩人として現在における人間のあり方への探究というものをお話されたわけでありまして、その最後のほうに付け加えられました問題は、文学は捨てられるというたいへん衝撃的なお話でありまして、それは結局宗教と文学という問題になろうかと思

## ベルント

「現代における個人」というテーマになっています。シンポジウムの性格に従えば、文学という言葉を加えて考えられるでしょう。従ってこのテーマは、実際には現代文学における個人もしくは現代文学における個人ということになるはずですが、

そのために、二つの前置きを設定させていただきます。まず第一に、このように広く示されたテーマを扱う場合、当然のことながら、答えを与えるより問いを投げかけることのほうが多くなるでしょう。第二に、ここで問題となる中心的な概念は、このテーマについて話すために根本的に、まず正確な定義を必要とします。すなわち個人という言葉でどのような内容を解釈でき、また解釈し得るといえるのでしょうか。この概念が日本で使われるようになったのは、実に明治時代の末期になってからのようです。そしてそれは文学にはどうやら夏目漱石の「我輩は猫である」に初めてあらわれました。やがて日常語に入ってきました。

大江健三郎の「個人的な体験」という小説のタイトルは *Eine Personliche Erfahrung*、つまりパーソナルな体験となり、*Eine Individuelle Erfahrung* インディビジュアルな体験などとは決して言いません。もし言うとしたら意味が変わってくる。辞書に従って、個人という言葉は

ます。そしてそれがいかにして孤独にたどりつけるかということであり、そこで、そこが真正の自我という問題とちょうど重なり合う部分ではないかと思えます。

ここで垂直軸をやや水平軸に戻しまして、皆さんからのお話を伺いたいと思いますけれども、まず最初にコメントイターとして、ユルゲン・ベルントさんにお話についてお話を伺いたいと思えます。

*Individuum, individuell* とただちに翻訳されてしまいがちですが、実際のところは日本語の個人という概念とラテン語の *individuum* という概念ははたして、まったく同じ内容を含み、まったく同じ内容を呼び起すのでしょうか？ 一見すると次のようであり、*Individuum* というのはドイツ語の辞書によれば、「個々の存在としての人間である。これは、その特殊性における個体であり、共同体との関係に見る個々の個人である」広辞苑によれば、個人について「国家または社会に対して、それを構成する個々の人」と記されています。たとえここから合同性が導かれるとしても、――私はそうは思いませんが――、そうだとすると問題は決して解決されたことになりません。というのは、これらの概念が歴史の過程でいかなる意味変遷をたどり、人類史のさまざまな時代においていかなるニュアンスで使われて、いかなる意義が付与されたかということとをさらに問わなければならないからです。

そして、一見したところ、明らかに一義的に思える現代という概念はどのような内容を包含しているのでしょうか？ 「現代」とは、「今日」「今」ということを意味するのでしょうか？ この言葉は「近代的（モダン）」と解釈されることもまたよくあるようです。いまやしかし我々がもうすでにポスト・モダンの時代に生きていますと主張する理論家たちもいます。それを前提とする「現代」とはどのような意味を持っているのでしょうか？



か？——概念の定義という問題性を詳しく論じることは、時間が禁じています。ただ、次のことが述べられるだけです。抽象的で学問的な特に人文科学、社会科学の諸問題を議論する場合、少なくとも大体のコミュニケーションが達成され得るのは、我々の事業に使える唯一のコミュニケーション手段、つまり人間の言語をできる限り厳密に取り扱い、したがって少なくともキーワードに存在する両義性を取り除き、あいまいなところをなくして、あれこれの概念をどのような意味に理解してもらいたいのか、できる限り正確に言ったときだけなのです。こうして私たちは対話を交わして、これによって新しい理解と認識に到達することができるとしよう。

金教授は論述の中で、「現代における個人」について診断を行って、若干の兆候を挙げていますが、それは先生の意見によると、今日の個人(individuum)の極めて顕著な特性に属するものです。具体例は別として、私が正しく理解した限り、金教授は——簡単に言えば、今日の個人は個性(Individualität)を失ったことで病んでいるのだと診断しています。今日の個人の状況描写をするにあたっては、キリスト教的—宗教的視点からであろうと、他の世界観からであろうと、その結果はほぼ常に同じでしょう。すなわち個人というものの、個々の人間と、それ共に人類全体が深い危機に落ちているように思われます。しかし、ここで問題となるのは、人類史上、かつて人間が危機意識を決して抱かなかつた時代、あるいは文化圏などあつたかどうかということです。詳しく眺めてみるとただちに判明するのですが、人間や人類がいまだかつてこれほどひどい状態だったことはないという嘆きは、本来人類史がはじまって以来、ほとんどあらゆる時代とあらゆる文化圏において何度も新たに繰り返されてきました。人類史の経過は、この局面のもとではカタストロフィー(大災害)と危機とが一重に連続したものにすぎないように見えます。今日の時代との違いは、価値の損失について、人間の非安全性について、混沌に見える世界の中での方向感の損失について、苦情がいまのような

音量でこれまでどの時代にもなかったほど多くの論拠とともに出されていることにあるだけのようです。今日の文化哲学は、もうとっくになされた壊滅の分析をするだけです。もともと西洋、つまり主としてキリスト教で規定されるヨーロッパで形成されたあの近代価値体系の壊滅を。これは我々の今日のテーマ、個人に関連させるとどういう意味になるのでしょうか。

“Cogito ergo sum.”「我思う、ゆえに我あり」と、ルネ・デカルト(一五九六—一六五〇)は定義づけましたが、それとともに理性による人間の自己規定を前提としています。デカルト、そして彼と一緒に他の思想家たちが指し示したのは、人間が個人としての自意識、理性の信頼性をよりどころとしなければならぬという新しい道でした。人間は最高存在である。しかし、これとともに新しい世界像ではさらにもっと高い存在、要するに全能の神のための場所がなくなってしまうのです。こうして神の全能という理念から人間の全能という理念になり、あるいは自然に対して人間の権力が途方もなく拡大していくことへの信仰が、少なくともはじめてあらわれました。人間は自然の支配者であることについて認められたのです。人間が主体であり、自然は人間によって支配された客体であります。科学の世紀とよく呼ばれる十九世紀は、優れた学術的な業績と成功でこの信仰を養いました。人間は自らを全能者として、創造者として定義づけました。簡単に申しますと、文学ではこの態度がゲーテの「プロメテウス」と「ファウスト」のヴィジョンに反映されています。すなわち神々が人間を創造したのではなく、神々を創造したのが人間である。この新しい市民的な人間像は、個人の全面的な解放、個人の自立性の証明の中に、その頂点を見出したように思われます。

しかしこれらはすべて努力して目指された理想であり、実際の情勢からは遠く隔たった哲学的状況であり続けたわけです。なぜならば、個人(individuum)が新たに成立したとことと共に、同時にまた個人の疎外というものが新しい社会的、経済的構造によって、そして個人自らの自

己疎外によって始まりました。——このプロセスは文学にも反映していますが、ケラー、シュティフター、ラーベ、フォンターネ、一九世紀の偉大なドイツリアリズム小説の重要な代表者たちの作品の中に一つの試みとしてあらわれました。それは現実の模写を通して世界をもう一度創造することによって、この時代の現実において、それにもはや存在していなかった客体と主体、自然と人間との統一性に関連の上で到達するというものでした。

さらに歴史が繰り返すうちに、特に十九世紀末期以来個人の自立性と全能という理念が決して達成されない理想像であり、一つの神話であることが間もなく明らかになりました。哲学とは、キルケゴール、ハイデッカー、ヤスパース、その他によって実存主義的世界像が打ち出され、人間の非安全性を顕照することで特徴づけられました。文学におけるその対応は、最初は多分ドストエフスキーに、そして際立った形でカフカに見ることができます。彼は孤立化して自立化した人間を描きましたが、それは魂が抜けた匿名の権力に支配された環境と衝突し、没落の宣言をする個人というものです。ここで生じるのは近代的な (modern) 個人を描写 (Abbildung / 模写) するための美学的な基本型です。これは、まだ今日でも部分的に使われており、たとえば安部公房の作品に見られるでしょう。

個人の差し迫った危機意識の強化は、第二次世界大戦以降の精神状況を示す際立った一つの特徴です。文学の領域では、ジョイス・ベケット、その他の小説で、すでに潜在的に暗示されたものが、今や、——例えばカミュ、サルトルなどにあらわれるように——一般的な現象となったのです。現実、全体的に疑わしくなりました。そして、一般的な不安感が十九世紀の小説文学では、また全知 (オールマイティー) の語り手のものだった登場人物に転換されて、語り手はいまではますます小説から消去されています。この語り手の登場人物の消滅とともに、また小説の主人公も消滅していきます。あるいは制限されるか、たとえばギュンター・

グラスの「ブリキの太鼓」のオスカーのように滑稽に形作られています。この発展は結局、「ヌーボー・ロマン」に最も鮮明に表れました。近代的な産業化社会で *Ich-Konurren* (一人称の輪郭) は消え失せてしまいました。もはや人間は行動する (*agieren*) のではなく、反応する (*reagieren*) のです。いずれにしても、主体の自立、自己規定、いわば個人の全能という神話は過去のものであります。——こうして現代のヨーロッパの小説文学の中で、またすでに述べたように、「ヌーボー・ロマン」の中で、あるいはドイツの小説家、ハントウケ、ハイセンビュッテル、グラスのもとで、現代の個人の状況が示されているのです。これはまさに客観的な現実、社会的・経済的發展、すなわち歴史が個人の自主独立という神話を打ち崩してしまったことにはほかなりません。

その責任はもちろん文学ではなく、今日の近代的な産業社会の現実にあります。今日の近代的な社会は、それ自身あるプロセスの結果です。このプロセスは、個人の解放と自立表明によってのみ、あるいはまたそれについての神話によってのみ可能となりました。

というのは、進歩ならびに自然に対する人間の権力の絶え間ない拡大への絶対的な信仰は、十七世紀はじめヨーロッパで生じていますが、大変手短に言えば最終的な帰結として次のことに導いたのです。すなわち、この個人の絶対的な進歩への信仰は、この個人の全体、要するに人類を危機に陥れてしまい、その存在についてそもそも疑問をはさむことになったのです。それも今日では、人間が自ら自分たちの活動によって人間たち、つまり人類から生物学的な生存基盤を奪い取っているのです、もはや思想の産物として観念論だけではなく、実際的な問題となっています。これは、今日の人間であり、現在の個人が根本から不合理な状態にあります。すなわち、そこで人間は自ら破滅することになりつつあるのです。金教授の出した診断への補足として、「現代における個人」の状況についてはこれぐらいにしておきます。

饗庭 どうもありがとうございます。

ただいまのお話は、二つ、大きく分けて考えられると思いますけれども、金先生のお話の中で、概念規定の問題をなるべく正確にさせていただきたい。

それは二つの問題があると思ひまして、一つは論理的な議論の展開の上で概念規定が揺れ動いてはいかげなものかということと、もう一つは現在の価値の非常に多元的な状況の中で、言葉それ自身にお互いがどれだけの信頼を持ち得るかという問題、その中でとらえられるべき問題だということだろうと思うのです。

もう一つの問題としては明らかな「個」をもった時代の文学から、「ヌーボー・ロマン」までおよぶ社会と人間の個人的なレベルからの、文学的なレベルからの対応関係は一体何だろうかということで、特に十九世紀から二十世紀の「ヌーボー・ロマン」にかけての、「不信の時代」というふうにも考えてもいいと思うのですけれども、そのようなお話であつたと思ひます。

問題をもう少し集約をいたしまして、たいへん大きな問題でございますので、たとえば金先生のおられる韓国の文化、そういった中の個人の問題と、比較文化的な問題といたしましてヨーロッパあるいは日本との比較ではどうかという問題もあるかと思ひますし、もう一つは、パシユラールなど引用されましたけれども、私がいいますのに個人の回復というものをただ宗教的なレベルに還元するのではなくて、むしろ「文化」と「自然」という問題でトータルな自然への回帰という問題がパシユラールにも含まれていてと思ひますし、そういった形で考えていきますと多々問題があろうと思ひます。

従つて、まず金先生のお話になつたこと、あるいはお書きになつたことについて、そしてそれを踏まえながらたゞいまのコメントイターのご発言、そういったものをこれから自由にお話をしていただきたいと思ひます。

どうぞご発言をお願いします。

上垣外 私が金先生の韓国語の原稿から翻訳致しましたので、一言申し上げさせていただきます。ベルント先生が概念規定の問題をおっしゃったわけですが、私、このペーパーをいただいたときに、日本語で言えば漢字を使つて

ある言葉がたいへんたくさん使つてある。それをどう訳すか。韓国語の場合の漢字の熟語と日本語の漢字の熟語は同じ漢字を使つていまして、歴史的に見ましてもおそらく日本で翻訳された西洋の思想の言葉が韓国に入つて使われているんですね。これは等価のものと考えてもいいんですが、たいへんそれは難しい、微妙な問題があります。

一例を 韓国の古典小説にチュンヒャンジョン、「春香伝」という有名な作品がありますけれども、あれを日本語の翻訳でお読みになつた方は、もしも原文をお読みになつたらたいへん驚くと思ひます。日本語でたいへんやわらかい、たとえば源氏物語のようなやわらかい大和言葉と比べている情緒でんめんとしたものと文章はみんな漢字が並んでいる。それは訳者の判断で、日本語では大和言葉がよろしいとして訳したと思ひますけれども、まったく漢文にある読み下し文のように直訳することもできるんですね。それをどういうふうにも実際に分けて、どこを大和言葉に変え、もとの漢語を残すというのは韓国語から日本語に訳す場合の大きな問題であるわけです。

ここで使われている漢字の熟語は、確かに大部分ドイツの哲学から明治の時代に、あるいは明治より少し早い時期に、たとえば西周というような哲学者がたいへんな苦勞をして漢字の言葉に移したものです。

我々は日本人も、韓国人も、あるいは中国の方も、この西洋の、特にドイツ哲学に由来する概念を使つて、たとえば現代社会とか個人の問題とかいうのを考えているんですが、よくよく考えてみると、ベルントさんがおっしゃつたように、どうも西洋で考えて使つていっているのとはいろいろな意味が違つたらしいというの、我々もよく分かつています。

しかし、どうすればいいかという、実に難しい問題があります。西周という人は、オランダに留学しまして西洋の近代的な社会や人間のさまざまな人間性を表現する理性とか感性とか感性とかいうものを訳したのですが、彼は最初大和言葉に翻訳しようとしてその試みが残つています。彼はそれをついに放棄して漢字に変えたんですね。それが日本にも定着し、韓国にも定着し、中国にも九割方定着しています。

これは文学的な表現の中の西洋近代に由来する漢語を、たとえば韓国語から日本語に翻訳する、あるいは日本語から韓国語に翻訳するという問題をやりますと、哲学でしたら一応西洋の individualism に個人が由来していると考えてそのとおり使っているかもしれませんが、文学的な表現の場合はそれをやはりできないんです。実に複雑な難しい問題があるということは申し上げておきたい。それは我々にとっては、明治以来の一〇〇年以上の苦しい歴史であると、私は思っています。

**饗庭** それ以外のご発言をお願いいたします。

**宇佐美** 今のお話からはたくさんの問題が出てくると思います。けれども今日の金先生のお話は、最初に司会のお話でもおっしゃいましたけれども、詩人的な感性と言いますか、そういうようなところで発想しておられますので、これを、たとえば現代文明における個の問題とは何かとか、あまり大上段に振りかぶって展開しだすと非常に話が大きくなりすぎて、収拾がつかなくなる。いや別に収拾がつかなくなってもいいわけですけども。やはり時間にはかぎりがあるわけです。

この問題は、一九五〇年代以降の文化人類学の領域でいろんな人が、レイヴィー・ストロースもそうでしょうけれども、グレゴリー・ベイトソンとか、そういうような人が様々なかたちで取りあげています。たとえばベイトソンは『精神の生態学』という書物の中で、人間文明における目的意識の突出であるとか、近代社会における異常なまでの自己意識の突出というような問題を批判する立場を強く打ち出しています。あまりにも合目的論的な目的意識を優先させた人間のどらえ方というものに対する反省がポスト・モダンというところまで起ってきているわけです。

その問題はいへん重要ですが、今日は、せっかくなのこういう機会です。で、私が是非、お聞きしたいのは、韓国社会というのがここの一〇年ぐらいの間に非常に急激に変化しているというようなことを、文学がどのようにとらえようとしているか、ということなのです。私は韓国の文学についてはあまりよく知らないんですが、映画が好きなのでから韓国映画をよく見るん

ですが、たとえばイー・チャンホ監督が描く映画の世界というのは、田舎から都会に出てきた三人の若者たちが都会の中でもみくちゃんになりながら自分というものを活力を持って確立していく。そういう世界を描いていると思います。人間性の喪失それに対する抵抗という今日のお話に関連するようなものを、非常にバイタリティを持ってうまく描いている。

一方ベ・ヨンギョン監督の「達磨はなぜ東へ行ったか」という映画は、これとは対照的に都会に住んでいる若者が文明社会の弊害を切り捨てて山奥の禅寺にこもって、そこで自分を見出そうと懊悩を重ねながら探究していく。そういう生き方を描いた、たいへんすぐれた作品です。

どちらの映画にも非常に私は感動しましたが、そういった韓国社会の急激な変化というものに対して、映像の世界というのはずいぶんバイタリティを持って人間を描こうとしているというふうなふうに思うんですけども、文学がそれに対していまの韓国の現代社会において、拮抗するような視点というか、あるいは創造の活力というようなものを持っているとお考えでしょうか。あるいは先ほどはテレビのことをおっしゃいましたけれども、文学に関しては悲観的な見方をしておられるんでしょうか。そういうようなことをもしお聞きできたらと思います。

**饗庭** いままでに出ました問題を少し整理しながら、いまの宇佐美さんのご発言もふくめ、そのお答えを金先生から聞きたいと思います。宇佐美さんのご発言の中で、一九五〇年代の韓国、最近の、私も見たんですけど「達磨はなぜ東へ行ったか」という映画の問題ですね。こういったものを見てみますと、戦後、個人という概念というものも含めまして、日本の社会の急激な変化、たとえば個人という問題にしても、言葉の問題にしてもずいぶん違ってきたと思うんですけども、にもかかわらず日本の場合にはまだ個人というのがエゴイズムの段階で理解されている部分が多かろうと思います。もう一つは、いまの韓国の状況というのかなり日本とパラレルなものも含んでいるんじゃないか。ある再生はありますけれども、そういったものも含んでいるではないか。

問題が 非常に開きすぎますので、そこでもう一度戻しまして、金先生に、先ほどの映画も含めまして、宇佐美さんのご発言にお答えいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

金 はじめのベルント先生のお言葉は評論者としてのお言葉ですから、私がそのことについては申し上げないことにいたします。

メモもありましたけれども、それは省略して、上垣外先生にはこの場でお礼を申し上げます。

そして三番目、宇佐美先生の言葉に対する返事ですが、いまおっしゃられた映画で、イー・チャンホ監督の作品の、田舎から都会に来た人たちの話は、模倣を流行させたような一つのやり方でした。そして、「達磨は東に向かう」という映画は、私も見ましたが、映像はよかったですけれども、映画としての取り組みがしっかりしていない。あまりにも心情に流れたのじゃないかと思えます。

いま私の頭に浮かぶのは、韓国人という人たちの性格です。私が韓国人の性格の標準かは知りませんが、感受性だけが発達しているんです。そしてそのほかのことには取りのけられた存在のように、その場に座りつくして何十年か、近代の文化についても日本の後ろから、肩のむこうに盗み見るような形で、日本語で訳した本を幾種類か読んできたし、いままたアメリカとか日本などからは産業の情報が取れないし、もらえないし、そして後からきた台湾とかシンガポールに追い抜かれるし、いろいろなことをしくじって、その間に発達したのは感情で、それが悲しかったり、もろくて涙をこぼしたりして、詩人が多いんです。そして感情の誘導で、達磨は東に向くというのも韓国的な性格からつくりあげた映画の一つの標本のような気がします。

それより、宇佐美先生のお話に対して私は答えをしたいんですが、韓国の文学であれば、北の文学がありますし、南の文学があります。そして北で捨てた文学がありますし、南で取り除いてしまった文学人もあります。これがいつになったら一つの窓にきちんとおさまって形をなすかしなければならない状況です。

それが韓国文学の悲惨な現状と言えますが、いま韓国の文学に対して悲観的か楽観的かというお言葉に対して、簡単に申し上げますと、文学においては悲観とか肯定とかいうことは大きな足踏みの中に含まれるものです。韓国は韓国人なりに一生懸命に生きるし、生き抜くために何かゴタゴタの中で、バッテリーの中の電気を使うように、忙しいやり方で、せせこましくて、いつも心情の中で発電をしながら、どこをどう歩んでいくか知らないように歩み続けているんですから、それが悲観にとどまるか、または肯定にとどまるかということは、その過程においては言えないと思えますが、韓国の状況によってもう一つ言わせてもらいますと、非常に文学的であると同時に非常に宗教的です。そして神父とか修道女があり余って、志願者がとても多くて困って、毎年修道院をつくりなおしてもっと大きい家をつくっているのも韓国だけの事情です。

それをひっくるめて、韓国人は胸で生きて、胸で傷ついて、そしてまた胸でやり直すというような種類の人種じゃないかと思えます。

貴重な時間ですから、これぐらいでやめます。  
饗庭 ありがとうございます。

ただいまのご発言についても結構でございますし、それ以外、どうぞご自由。

菱川 金先生のお話、たいへん刺激的に聞かせていただきました。特に個人という概念をお使いにならないで単独者という言葉をお使いになったわけですね。そのへんについて、概念規定がいまいちではないかという指摘もありましたけれども、実はこれはたいへん大切な問題を含んでいるのではないかと、私には聞かされたわけですね。

考えてみますと日本の文学も、どちらかと言いますと私中心の文学でして、他者というものを充分に取り込んでこなかった日本の長い伝統があって、他者というものをどういうふうに取り込むのかという形で、問題意識は直接的な課題にはならなかったように思います。

戦後の日本の文学の中でも、文学の理論そのものが戦前と大きく変わって

きたんですけれども、その原因を考えてみますと、そこに他者の問題というのが大きくかかわっていて、それが文学理論そのものをも大きく変えてきたというふうに思います。そういう意味で、金先生のお話の中に、まず最初に単独者という問題を提起されたということは、とても大切な視点じゃないかと思っただけです。

たとえば、単独者というのは他者とういうふうにかかわりを持つのか、金先生の文章で言いますと「重要なことは、真正の単独者がまた別の単独者と融合するという点だ」というふうにはペーパーのほうにお書きになっていらっしやいますけれども、具体的な例を申し上げますと、日本の歌人で佐々木幸綱という人がおりますが「夏の鏡」という歌集ですけれども、韓国のキム・ジハが死刑になろうとしたときに、それを日本の詩人として見過ごすことができない。そのときに彼にとつての他者はキム・ジハだったわけですね。

それを皿の上に盛られている一つのむかれた白い桃、白桃にまさに刃が当てられてズタズタになろうとするイメージで描きます。しかし自分はその立場にはいない。それを一方で見つめながら、自分は万葉集の世界に入っていくしかない。しかし、万葉集の世界に入っていくとき、その他者を自覚することによって入り方が違ってくる。真正の単独者がもう一人の単独者と結びつくというのは、まさにそのような結びつき方で、これはいま短歌の世界の中の現象だけを申し上げましたけれども、似たような現象は文学全体の中で広く起きてきているのではないかなというふうに思います。

そういう点で、他者の問題を提起されたということは、今日のお話の中でとても大切だったというふうに思うわけですね。

しかし、金先生もご指摘になっておりますように、現代の文明が個人をさまざまな形で破滅的な状況に追い込んでいって、先ほどのユルゲン・ベルント先生のお話ですと、全能神話というのが崩壊するという時代の中にさしかかってきているわけですね。その中で、最終的に個人を救済する方法として、単独者の中で靈魂の位置づけ、魂ということを経験されたように思うわけです。

いまのお話を聞いておきますと、靈魂というのが宗教的な意味での靈魂とすることをおっしゃっているのか、もっと別な形での魂とすることをおっしゃっているのか。韓国の場合には「氣」という一つの考え方があってはないかというふうに思うのですけれども、そういうものと、いまおっしゃってあります靈魂というものがどういうふうにかかわりを持っているのか。

日本の場合ですと、日本の文学の中でも、饗庭先生が要約をなさって、現代自然がどんどん破壊されているという問題とも個人の問題はかわりがあるというふうにおっしゃったんですけれども、日本の文学はどちらかと言えば自然から美だけを学び取るうとする。それはいいことなんですが、別な言葉で言えばただ美しいと言つてながめて喜んでいっているのは、自然から美を搾取する目的の資本主義の中に陥っているというふうには思いません。

そうではなくて、自然そのものの持っている痛みであるとか、魂というふうなものやどういうふうな形で文学作品の中にとらえていくのか。現代の詩人たちはそういう困難な問題に直面して、やはりそこで魂という問題に突き当たっているわけなんですけれども、韓国の場合、魂というのがどういう形でとらえられているのか、もう少し具体的な形でお話をいただければありがたいなというふうに思いました。

金 単独者という言葉は、韓国で翻訳された本の中から取った言葉です。そしてドイツ語などの言語では、ほかの言葉に翻訳された可能性もあったと思いますが、その単独者なる言葉の定義は、神の前に、また人の前に置いても一人者だということで、一人立ちいる人という定義でした。そしてそれは、他者との関係ではなくて、単独者は群れと対立する概念です。キリストを張りつけにさせた人たちは群れですから、責任もない、名前もない群れでした。その群れと差別する単独者でした。

私が話しました他者というのは、いくら長い過程であっても人間には目的意識と言いますか、いくらそれがはるかな道なのであってもいつか到達する点のそこに他者との融合ということを考えて、それをそばに引つ張って話しました。その単独者が他者に至る過程は、非常に長くて、一生涯を費やすと

か、また1世紀を費やす、または数千年を費やすかもしれないはるかな過程における一つの哲学的目的と言えるのです。

一人の単独者が、すぐに一人との間に融合ができるということは、人生の夢ではありませんが、その実現性の難しさを文学では取り上げて、いろいろ小説をつくるのか、詩をつくるのかするものだと思います。

靈魂のお話ですが、西洋で無意識とか、夢の解釈とか、また四次元、五次元とかいうことも何か人間の存在外、また存在の奥深くにひそんでいる人間のエネルギーに対する漠然とした指摘だと思っています。そして韓国の文学で、この靈魂をどう取り上げたかということを確認に話せる方法はないと思います。それはその人なりの価値観と世界観、人間観からくる自由な選択だと思っています。

私の場合でしたら、私はカトリック教ですから、靈魂の不滅を信じて、その信じるという価値観のほんの小さな場所、私は自分の文学魂というのを養って今日に至ったと思います。そして人々の選択は違いますが、私が韓国の文学の中における魂に対しては、とうていご返事を申し上げられないのが当然かと思えます。

菱川 ありがとうございます。

饗庭 いま二つの問題をめぐってでありましたけれども、特に靈魂の問題というのは、最初おっしゃった無意識の中にひそむエネルギーという問題、こういうとらえ方を考えていきますと、単独者といい、個人といい、いまの靈魂でしょうか、概念規定が民族によって、あるいは地域の文化のコンテクストの中で少しずつ違っている。こういう討論自身が持っている意味は、そういったものを埋めていくことにも一つあるわけですから、そういう形で概念規定の揺れ動きそのものが逆にいいものを生み出すということもあるわけで、そういう点では、現在我々が持つております討論それ自身が意味を持つていっていると思います。

先ほど菱川さんのおっしゃった中で私に関係のあるところがあったと思いますので、「自然」のことをちょっとだけ付け加えておきますと、私が申し上げ

ている「自然」というのは、たとえば「文化」との関係でありまして、「自然」というのは「文化」に先立つと同時に文化の下部構造をつくっているわけで、この二つを、一つは通時的に考えるのか、共時的なレベルで考えるのか、それを二つ持った形での考え方として私は「自然」を用いているわけです。そういったことが現在の根源的な個人対社会というものの根本にあるんじゃないかという気がしてお話したわけですね。

もう一つ、「他者性」の問題でありますけれども、日本の戦前の文学には「他者性」の問題は非常に少なかったんですね。ところが戦後、「第三の新人」に至りまして「他者性」の問題がいやおうなしに全面に出てまいりましたが、その一番極限的な状況は、島尾敏雄の文学の中にあると思いますね。あの妻との地獄的なレベルの中で彼が見出した「他者性」は、いまおっしゃった金先生の「他者性」とさほど遠いところにあるわけではないというふうに思います。

それでは、十分ぐらい延ばしていただきまして、ほかの方のご発言を。メラノヴィッチ 私は、ご発表の中から二つばかりの言葉と問題点を強調してみたいと思います。それも、いままでの発言と関連していると思います。

十四ページにプロメテウスの話が出ていますね。そのプロメテウスは毎日新しい傷を受けるなどの話のことですけれども、それは私がいままで見てきた韓国文化の中とは非常に深く関係していると思います。それは、韓国語のハン(恨)、一種の苦しみと言いますか、共同の一つの哲学か何かになっていると思います。それは私なりに言えば、集団のプロメテウスの感覚だと思えます。そういうのが日本の文化にあるかどうかは、ちょっと疑問があります。

もう一つの問題は、いままで話されたことですけれども、それもまた十九ページには、人間ははかりしれない神秘の器ですね。神秘性という言葉も強調してみたいのです。いままでの菱川先生のご質問の中でも出てきましたけれども、私はたくさん読んでいませんけれども、偶然かもしれませんが、ハン・マンスクさんの「アルムダウンヨンワン(美しい魂)」という、日本語に

すれば魂の礼讃みたいな意味ですね。またはヒューマン・スピリットという小説がありますね。それはキリスト教とは関係ないですね。しかし、その小説の中でもちろん一番強いのは、昔と現在、将来に向かって続いていくのは、やっぱりある種の霊魂ですね。それは韓国文学には、やっぱりそういう神秘性、特にたいへんな戦争の後で強く文学の中に流れていますね。緊張感も与えます。

ユン・フンギルという若い小説家がいますけれども、日本語にも訳されているものもあると思います。「チャンマ(長雨)」という小説の中でも、人間のもう一つの次元と、また人間がその次元にいるような、朝鮮戦争のときの話ですけども、そこでも霊魂、魂、神秘性が非常に強い跡を残していくんですね。

金 先生のお言葉、本当にありがたく聞きました。二十年ぐらい前ですが、外国人の新聞記者が韓国に来てインタビュウされて「どうして韓国に来られましたか」と言われて、その人の返事がこうでした。「悲しみに飢えて韓国に来ました」と。私もたいへんショックを受けました。悲しみを食べるためには韓国に来る必要があったというのです。それがいま先生のおっしゃられた集団的なプロメテウスとご覧になったのと一致すると思います。

古い傷口にまた新しい傷ができて、その傷口がいえる前にまた新しい傷口ができるというのが韓国の状況です。その状況の罪は、韓国人自ずからせつちで、何か早く到達しようという、そして歴史的な飢え、名声にも富にも飢えていましたから、自分の持っているのをみんなに見せびらかすために、自分の家よりもとても合わない自動車に乗って回るとか、いろいろ悲惨を自分で、うちわで風を送るようにしながら、他力、自力が合成で韓国の悲惨をつくりあげて、またいまも悲惨の真っ只中にいると思います。もう一つ、いまおっしゃったことに、本当にいいお言葉をくださったと思います。集団的なプロメテウスじゃないかなと。

もう一つ、神秘というのは神秘性であるべきです。それは機会がありましたら直したいと思います。そして、ユン・フンギルとかハン・マンスタとか

いいたが、韓国人は苦しみの中でもだえて、ひもとか縄を両手につかまらうに何かに依存する本能があります。その本能が、生涯が終えた後の構成だとかいうことを、漠然とはありますけれども、そこに使い残した情熱をおち込んで、何か霊魂的な、現実ではないのに窓いっぱいあけ放つて、むこうのほうに飛び走るか、じゃなければ一生懸命大声でどなるといように、霊魂と言いますか、とにかく存在の中の活力ですね。あそこに対する信頼感もしくはそこに対する追求があると思います。それも先生が指摘してくださいとおりでと思います。

饗庭 あまり時間がございませんけれども、もう一度ご質問の問題を集約しつつ、いわゆる概念規定をめぐってはじまったこの討論が結局いろんな問題を深く掘ることによって我々に少しづつ、たとえば韓国の文化の問題、霊魂の問題、魂の問題、いまおっしゃったような問題等すべてがあるわけで、そういうことが見えてきたことが非常にプラスだと思えますけれども、ここでエルゲン・ベルントさん、最後に何か。

ベルント 私がちようど二週間前にクラフフ・オフローンの新しい報告を読みましたときに、すごくショックを受けたんです。その報告を読みますと、人類の将来性、フューチャーがどうなるか。人間そのものが滅びるか。いまの立場、いまの行動、いまの活動、変わらないと人間は自ら滅びる。それがいつになるか。一〇〇年かかるか、一万年かかるか、それは別の問題だ。でも、事実として人間の存在がすごく危なくなったということです。

いまの状態で個人の回復というと、どういう意味があるでしょうか。十七世紀から十八世紀にヨーロッパに成立した個人の回復のことでしょうか。私の考えは、個人の回復という言葉を使うと、新しい個人が必要になると思います。新しい個人、新しい人間が必要になるでしょう。少なくとも新しいエシックスが必要だ。これは一つの大きな問題になると思います。それは、どの文学であつてもそうです。日本の文学であつても、ドイツ文学であつても、アメリカの文学であつても、これからの文学にとって、一つの大きな課題になる。それが一つです。



もう一つは、概念的なことですけれども、先に上垣外先生がおっしゃったように、定義のことはたいへん難しい。それはそうだと思うんです。それが日本語とかドイツ語とかの間の理解のために、明らかにするために、問題だけじゃなくて、ドイツ人の中でも同じ概念を使っても同じような意味で使うかどうか、それはまた別問題です。どんなに難しいことであっても、私の考えではやっぱり学問的なディスカッションをするときに概念定義が絶対必要になると思います。

特に日本語の場合は、多々あいまいなところがあると思います。それは、さっきも饗庭先生がおっしゃったように、個人主義という概念が、普通は日本で個人主義という言葉を使うとエゴイズムと同じような意味になる。それは大きな誤解を起こすと思うのです。少なくとも普通のヨーロッパの人たちが確かに個人主義の世界観を持っている。それは確かだと思います。だからヨーロッパ人はみんながエゴイストだと言えないと思います。普通の会話の中で日本の方と話すことになる、ヨーロッパ人はみんなエゴイストだ。それは一つの問題の理解のまちがいだと思うのです。

個人のことですけれども、ヨーロッパに十七世紀、十八世紀に個人が成立したということは事実だと思います。日本には、ヨーロッパ的な個人はまだ十分に成立されてないと思います。されてないうちに、個人という考え方が危なくなつた。日本に、特にいまの日本の社会の中で、精神的にすごく混乱があると思います。

とにかく、繰り返しになるんですけども、個人という問題が、新しい人間が新しい個人をつくるのは、これからの文学の大きな課題になるでしょう。饗庭 ありがとうございます。

現代における個人という、その個人の概念そのものでありますけれども、ちょうどこの研究センターの教授をしておられる濱口恵俊先生が、個人の成立をヨーロッパ的なものと日本的なものにお分けになりました。「個人主義」という言葉で、関係することではじめて「私」であるという日本の「私」と「行為する私」というヨーロッパ的なこの二つの概念、このチームを使って研究されておられます。おのおのどういうチームの中であろうと現代個人のも

どり方というものは、各人各様でありながら抽象的に言えば個人を回復する道というのはあるわけでありまして、そういう問題に対してまた今日の討議が新しい示唆を得られたのではないかといいふうに思います。

最後に、中西先生、一言お願いします。

中西 いつも最後の責任を取らされるような感じになりました、責任重大でありますけれども、たいへん光栄であります。確かにいま私、伺っております、個人の危機というのがいたるところに日常茶飯事のように言われていふうに考えておりました。最後のところでベルント先生が、新しい個人という概念を出される。饗庭先生が個人の回復の道はいろいろにあるだろうというお話、こういうものの中ですがつてこの問題をこれから考えていくべきだと考えました。

その一つとして、自然という問題も菱川先生から出しました。対概念にはありませんけれども、たとえば反対のものを考えてみれば、一種の都会とか都市とかいう問題があるだろうと思うんですね。宇佐美先生がおっしゃった映画の問題もそうですし、個人の喪失というのは韓国だけに限らないし、日本以外にももちろん限らないし、たとえば映画の話が出ましたので、映画を言いますと、グルジアとか東ヨーロッパの国々でつくられる映画が個人の近代文明の中における喪失という非常に大きな問題をテーマにしているように思うんですね。ポーランドなんかも含めましてそうだと思います。そこに都市という問題をもう一べんいまの問題の中で考え直してみることから、一つ突破口があるのではないかといいふうことも考えました。

こんなことを申し上げるのも、もしかしたら最後のところの集約がパネルにかかってくるのではないかと思います、もしパネリストの中で議論ができれば、たいへんありがたいと思っております。

以上です。

饗庭 どうもありがとうございます。

これをもって午前中の国際集会を終わりたいと思います。